



TITLE:

『海國四説』の意味

AUTHOR(S):

村尾, 進

CITATION:

村尾, 進. 『海國四説』の意味. 東洋史研究 1992, 51(1): 71-105

ISSUE DATE:

1992-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/154397>

RIGHT:

『海國四說』の意味

村 尾 進

清末のある種の文章を讀んだときに、かすかではあるが奇妙な感じを覺えることがある。それは大ざっぱに西學源出中國説、⁽¹⁾あるいは時に中體西用的な口吻といわれるものである。西洋のあるもの（西學 A）は、現在の中國にはない確かに優れたものである。しかしそれは元來古の中國のあるもの（中學 B）に起源を持つから、我々はBを探究し學べばそれでいいのでありAをことさらにまねる必要はない、というものである。

しきりに眼に觸れるこのような言いまわしで際立っているのは、西洋に對する意識の激しさと自尊心、強引さといったものだが、これに對し我々は、西洋の優位を認めながら結局はそれを斥け中學のみを許していると消極的に評價することもあるし、彼らが中學を持ち出すことを中國自身に即したやり方として好ましく思うこともある。いずれにせよ彼らの口調の中にある西學と中學との嚴しい區分、對照を疑うことはできないし、それに言及する我々の言葉そのものがそれを前提としている。

だが、奇妙なことに彼らの強い調子にもかかわらず、西洋のAが中國のBに起源を持つといっているかぎり、そのいい方自身AとBとの親しさを本來認めていることになる。そもそも西學Aと中學Bとは、理解された意味の上でそれ自身として明確に區分されているのか、つまり區分できるような環境にあったのか、彼ら自身區分しようとしていたのか、當時において西洋を記述するとはどのような行爲であつたのか、彼らの記述の仕方は現在の我々とどれほど似たものであつた

のか、ということとは慎重に考えてみる必要があるように思われる。

『海國四説』は名の通り四つの部分から成り、道光二十四年から翌年にかけて順次刊行された西洋に對する最も早い時期の記述である。著者の梁廷枏が、これに僅かに先立つ魏源の『海國圖志』を強く意識していたことは疑うことができない。そもそも著作のある部分は『海國圖志』から明言することなく踏襲したものであるといった、とりわけ微妙な關わり方をそれはしているが、魏源に對する意識の強さは總序の中に最も端的にうかがうことができる。

(この作品の命名について)「記」ではなく「説」としているのは、中國の人が外國のことを述べるかぎり(以中國人述外國事)おのずからスタイルというものがあるからである。また實際に足を踏み入れたところでもないから、記述が信じられるものであるか否かがどうしてわかうか。とても李思聰の『百夷傳』、侯繼高の『日本風土記』のようなわけにはいかない。

『海國圖志』が西洋人の最新の著作を利用していることを「西洋の人に西洋を語らせる(以西洋人譚西洋)」と魏源は誇ったが、その氣樂さを揶揄するかのように「中國の人が外國の事を述べる」と梁廷枏はいう。「記(志)」ではなく、「説」といったとき、そこには二つの含意があるように思われる。「説」とする積極的な理由としての、事實そのままに書きつらねるのではなく中國人としての大義・解釋を述べなければならないという意志と、「記」とできない消極的な理由としての、事柄が眞實であるかどうかを確めるすべはないという、作業を終えての経験とためらいである。魏源の『海國圖志』は、林則徐から託された『四洲志』をまず配置、續いて補足の資料、コメントを加えるという體裁をとり、原材料と彼自身の考えとは明瞭に區別されている。梁廷枏は、魏源が作業を終えたこの場所から出發し、自分なりの構成と記述をもった作品を作りあげようと試みた。⁽⁷⁾その時我々、例えば翻譯と解釋という面倒な問題を、彼は引きうけざるを得なか

った。事の難しさは彼も感づいているように思われるが、その對處の仕方に當時において西洋を記述するということの意味を見てとることができる。

この文章の中で私が行っているのは、『海國四說』がどのように書かれたか（材料、材料の様子、材料に對する解釋）を検討することではない。それは思想の研究というよりは、思想を最も良いかたちで展開できるような場を定めようという小さな試みである。清末の思想についていわれていることを、一度は書かれたテキストのあり方の問題に凝縮して考えてみることは無駄ではないと思われる。その時、おのずから我々の讀解の仕方も問題になり、事柄は彼らと我々を共に含んだより大きなものになるであらう。

—

『海國四說』の中で西洋の國家を直接記述しているのは『合省國說』と『蘭審偶說』の二書である。カントンにおける西洋の記述（中國との交渉の記載も含めたより廣い意味で）はこのふたつの前後にいくらかの歴史をもっているが、はじめの二作を除いて、他は梁廷枏の個人的著作といつてよいものである。⁽⁸⁾

海錄

（道光）廣東通志 卷三百三十（外蕃）

廣東海防彙覽 卷三十六—四十二

粵海關志

海國四說

耶穌教難入中國說

合省國説

蘭甯偶説

粵道貢國説

英吉利國記・合省國記

夷氛聞記⁽⁹⁾

道光十年代のなかば梁廷枏は廣州城内に移り、十五年秋に越華書院に設けられた廣東海防書局に入って總纂として『廣東海防彙覽』の編纂に携わるようになる。翌年春には百餘卷のものができたが、繁衍を嫌って四十二卷にまで縮められた。後に林則徐の賞讃に力を得て、當初の意圖どおり上呈上覽されることが決められ、編纂の曲折を記した彼の跋文は削除された。道光十七年には粵海關志局の總纂の任につき編纂を開始する。道光十九年末には完成していたようである。これも呈覽を念頭に編纂されたもので、『廣東海防彙覽』と同じように上呈のための表文を梁廷枏が代作している。⁽¹⁰⁾

この二書には衙門の檔案資料が多く使われている。『廣東海防彙覽』は總督から布政司に及ぶ諸衙門の檔冊、『粵海關志』は粵海關の檔冊を互いに出入がないように考慮しながら利用したと梁廷枏は述べている。⁽¹¹⁾しかし西洋諸國に對する記述については、從來と同性質の材料に據っているにすぎない。『廣東海防彙覽』には紛争と交渉の記述が多く、イギリス・アメリカそのものに對する記事が見られないが、『粵海關志』には卷二十三に兩國に關する記載がある。イギリスについては、その中に由來のわからない新しい情報がいくらか見られるものの、しきりに使われているのはやはり『舟車聞見錄』『海國聞見錄』などである。その引用はより豊富になつてはいるが、全體として『道光』廣東通志』の域を出るものではない。アメリカの記事も、アフリカと混同するという誤解の解消を除けば、十行足らずしかなく『道光』廣東通志』と同様にとりわけ貧弱なものである。

梁廷枏は『合省國説』の序文で自分の手にした材料を、(一) 前賢の記載、(二) 案牘、(三) 通事・行商の口述、の三つに分類している。この事情は『合省國説』に限られない。一般的に十九世紀前半のカントンでは、とりわけ知識人たちにとって、西洋へ行き自ら實見する、西洋人から直接情報を得るという可能性は始めから考えられていない。船員として謝清高が實際に見聞したところを筆録した『海録』は貴重な例外といえるだろうが、それでも西洋については聞き書きが多く、實際に訪問したのはイギリスとポルトガルのみであったと思われる⁽¹²⁾。またアメリカについて最も顯著なように、通事・行商の口述は混亂が多くとりとめがない。結局、未知の對象(イギリス・そして特にアメリカ)について文字で表現された材料しかないことをそれは意味している。述べられた事柄に確かさが無いという總序で述べられた梁廷枏の不安はひとつにはここに由來し、同時に自らの記述をつくりあげるといふ試みを許容する餘地をつくっている。彼の前にあるのは文字の意味だけであり、その向うにある指示された對象としてのイギリス・アメリカの現實にまで出ていくことはない。彼に許されるのは、文字の意味から生まれたイメージをそれ自身展開させていくことだけであり、對象としてのイギリス・アメリカの現實からその意味の正否を判斷することではない。

『粵海關志』までは、書かれた材料といっても衙門の案牘には西洋そのものに對する記述は見られないから、前の分類にしたがえばかろうじて役に立つのが「前賢の記載」(正史・歷代の地理書・明末清初の宣教師の著作・『海國聞見錄』など)だけということになる。しかもアメリカについては特に情報が乏しい。しかし記述された情報は『海國四説』になってこれまでになく豊富で新しいものになる。そのひとつは十九世紀前半にプロテスタントの宣教師が自ら中國語で著した書物・パンフレットであり、いまひとつは林則徐の翻譯作業によるものである⁽¹⁴⁾。

『海國四説』には、材料によって記述の異同があることを説明するために適宜雙行注が附されており、その中に引かれた書名が、利用された材料を知るためのひとつの目安となる。アメリカについて記した『合省國説』にはおおよそ三十餘りの書物の名が擧げられ、他に『粵海關志』編纂の際に収集したと思われる貢表・稟件も利用されている。そのうち、

『東西洋考毎月統紀傳』⁽¹⁵⁾「新聞紙」⁽¹⁶⁾は最新の情報として注意する必要があるが、『合省國説』の骨組を成しているのは、やはりブリッジマン⁽¹⁷⁾(Elijah Coleman Bridgman 裨治文・高理文 一八〇二—一八六二)が著した『美理哥合省國志略』『亞墨理格洲合省國志略』である。これがなければ『合省國説』自體成り立たなかつたといつてもいいすぎではない。粵海關志局・廣東海防書局にいるときから材料を集めていたにもかかわらず、アメリカ合衆國については建國より聞もないためにまとまつたものを著すだけの手がかりを缺いていたのである。⁽¹⁸⁾『美理哥合省國志略』はブリッジマンが一八三八年に完成した、アメリカ合衆國についての總括的な記述である。本來全百二十五葉で二十七の節に分けられていたが、現在は『海國圖志』中に分斷して收められたもの、及び『小方壺齋輿地叢鈔再補編』中のものが見やすい。これにやや改訂を加えたものが『亞墨理格洲合省國志略』で、やはり二十七節に分けられ一八四四年に香港で出版された。⁽²⁰⁾(以下、『志略』あるいは場合によっては『美理哥合省國志略』とする)⁽²¹⁾

『蘭審偶説』に使用された材料も『合省國説』以上に豊富になっているが、それは魏源の『海國圖志』五十卷本を手に入れたことによる。カントン時代の林則徐に最も親しいカントンの知識人は梁廷枏であつた。しかし彼は林則徐の翻譯作業には關つていなかった。その作業の成果は『海國圖志』を通じてはじめて利用することができたのである。⁽²²⁾『蘭審偶説』の中で『海國圖志』の痕跡が認められないのは卷一だけであろう。たとえば『澳門月報』からの引用といつても、それは本來『海國圖志』の中に含まれていたものを斷りなく利用しているにすぎない。とりわけ『海國圖志』卷三十三に收められた『四洲志』のイギリスに關する記述は何らかの形で殆ど『蘭審偶説』の中に含まれており、これが同書の根幹をなしている。

林則徐の翻譯作業は欽差大臣としてカントンに到着した道光十九年正月直後から始まり、想像以上の規模をもつたものであつたが、現在見ることはできるのは五種にすぎない。

a 澳門新聞紙（『澳門月報』はその選編）

b 四洲志

c 華事夷言

d 各國律例

e 洋事雜錄

a は *Canton Register*・*Canton Press* などの英字新聞の記事の翻譯⁽²³⁾、b は マー・ムーリー (Hugh Murray) の世界地理書⁽²⁴⁾、⁽²⁵⁾ ⁽²⁶⁾ c・d もそれぞれ西洋人の著作の部分的翻譯、e は西洋に關する折々のメモランダム⁽²⁷⁾の集積（主として聞き書き）ともいうべきものである。

『洋事雜錄』は林則徐の收集した資料のごく一部を摘抄したものとされる⁽²⁷⁾。おそらく雜錄群ともいうべき多量の西洋に關する未整理のメモがあり、現在私たちがたまたま見ているのはその一部にすぎないのであろう。翻譯に攜ったのは、袁德輝・梁進德ら四人の中國人とパーカー (Peter Parker) などいくらかの西洋人宣教師であった⁽²⁸⁾。

梁進德による『四洲志』の翻譯については、誤譯・削除の多さ・要點の分りにくさなど多くの問題が指摘されている⁽²⁹⁾。その中でもとりわけ目につくのは、現在の私たちが最も知りたいと思う部分、イギリスの政治組織について述べた箇所の音譯の羅列である。例えば三葉にわたる職官の羅列は次のように始まる⁽³⁰⁾。

律好司衙門あり。各衙門の事務を管理し、大訟を審理す。羅壓爾錄司四人・阮治彌索司二人・愛倫阮治彌索司一人・錄司二十一人・馬詭色司十九人・耳彌司百有九人・委爾高文司十八人・彌索司二十四人・愛倫彌索司三人・馬倫司百八十一人を額設す。斯葛蘭比阿司十六人は即ち斯葛蘭部屬に在りて選充し、三年ごとに更易す。愛倫比阿司二十八人は即ち愛倫部屬に在りて選充す。統計するに四百二十六人なり。事ありて任を離るるは、一人を薦めて自らに代

らしむるを許す。凡そ律好司の家人の法を犯すは、若し死罪に非ざれば概ね收禁を免す。⁽³¹⁾

この「律好司 (House of Lords)」の記事の後に「巴里滿衙門 (Parliament)」甘文好司 (House of Commons)」と同様の記事が続く。當時においては理解することが困難であったと思われるこの記事は『蘭寄偶説』卷三にほぼそのままの形でとり込まれている。このような官職の音譯の羅列は當時の人々にそれを解釋する能力がなかったことを示すものであるが、林則徐の『四洲志』の中でそれがとりあえずそのまま放置されているということにはそれなりの意味があるように思われる。官職の音譯の例は『洋事雜錄』の中にも見られる。だが發音そのものへのこだわりはそれにとどまらず、月の讀み方、貨幣の名稱、多くの固有名詞・普通名詞 (Island 愛倫・Dictionary 啞臣米利、のような) にまでひろがっている。『洋事雜錄』中にはまた、旅英歸僑・旅印歸僑、宣教師と接觸の多い袁德輝・梁進德、さらにはストーントン (Vincent Staunton) のような西洋人からの聞き書き、圖章・廣告のような瑣細な物、そしてロバート・モリソン (Robert Morrison, 一七二一—一八三四) の辭典にはじまる多様な基礎的・工具書的書籍の収集、簡明な中西曆對照表の作製などを窺うことができる。このような『洋事雜錄』に見られるのは、言葉の意味だけをただちに求めようとしない態度であり、(現在の私たちが言語を修得するときのように) 時間をかけて基礎的な知識を獲得し次第に對象に近づいていくとする姿勢である。意味の不明な音譯をそのまま放っておくことは確かに失態には違いないが、しかしそれは安易な譯を性急にあてず、意味をもたないまま残しておき將來の解釋を待つという含みもあるのである。これはおそらく『洋事雜錄』だけに見られる構えではないだろう。比較的まとまりの良い『四洲志』「澳門新聞紙」のような翻譯の後に新出の『洋事雜錄』を見ると、後者が附屬的なもののような感覺を抱いてしまうが、現在残っている『洋事雜錄』が林則徐の翻譯作業のごく一部であるというのなら、⁽³²⁾この雜錄こそがその作業の性質、完成した翻譯というよりも將來の整理・解釋を待つ雑多な覚え書きの集積という性質をよく表現していると考えられる。そして『四洲志』も體裁こそまとまっているように見えるが、そのようなもの

の中の一つとして考えるべきなのであろう。

だが、意味を手取り早く獲得したい梁廷相はこのように思われる。『合省國説』とは對照的に『蘭審偶説』は彼にとってきわめて不本意な著作であつたように思われる。一度は『四洲志』をそのまま『蘭審偶説』の中にとり込んだ彼は、『蘭審偶説』が完成したその時から改削の作業にとりかかっている。梁廷相には『英吉利國記』という不分卷五十葉の著作がある。その序には「道光二十有五年端六梁廷相識」とあるから、これは『蘭審偶説』の序の時日「道光二十五年端五」のわずか一日後である。同性質の二つの著作を平行して製作していたとは考えにくい。『蘭審偶説』が完成した時にその序文をつけ、翌日に續いて『英吉利國記』の序文を作り、そのまま作業に入つたのであろう。この書は『蘭審偶説』の單純なダイジェスト版であり、作業自體にどれほどの時間も必要としなかつたと思われる。國立國會圖書館に所藏されている『英吉利國記』には民國十一年夏の「東軒逸人」という人物の識語が附されており、それによつて『合省國記』という書が對になつていたことが知られる。⁽³³⁾三卷とあるから、それは『合省國説』と少なくとも量の面で大差なかつたと考えられるが、それに對して『英吉利國記』は『蘭審偶説』の記述の不要な部分を、字句にはほとんど觸れることなく半分近く削ぎ落したものである。

同様に『英吉利國記』の序も『蘭審偶説』のそれを三分の二ほど單純に削り込み、そのことによつて著作の意圖をより鮮明にしている。貿易こそがイギリスという國家の生命であり、その行動の基準であること。その歴史を記すとき貿易について詳細にならざるを得ないのは、諸地域における積年の紛争がすべてイギリスの貿易を原因としているからであること。これは『海錄』に始まる、カントンの人々の共通の認識だといつてもよい。この主旨に従い『蘭審偶説』を機械的に聞引いていったのが『英吉利國記』であるが、これをさらに中英貿易に關する事情だけに絞り込んだのが『夷氣聞記』巻一巻頭からの記述である。ここでは『廣東海防彙覽』『粵海關志』編纂の時に收集された資料が再び用いられ、記述はなめらかで現在の我々の感覺に近い要領を得たものになっている。

しかし『蘭裔偶説』から『英吉利國記』への改創は、このような事情以上に、意味を生まない音譯の羅列を梁廷枏が嫌ったことに原因があると思われる。少數の例外を除いて『蘭裔偶説』における固有名詞の音譯の羅列を含む部分(官制・地理に關するものが多いが)はすべて省略されるか、普通名詞に巧みにすりかえられている。音譯の羅列を排除していった結果がイギリスの貿易を中心とする記述になったといっても誤りではない。⁽³⁴⁾このことは『蘭裔偶説』に梁廷枏が満足できない理由を端的に表現しており、逆に『合省國説』が満足 of いくものであったことを示している。

またこの改變の作業の中で『蘭裔偶説』を作製する際に一度は捨てさった材料(その事情は雙行注の中で説明されている)を『英吉利國記』の中で特別の理由を述べることなく優先的に用いるということが行なわれている。⁽³⁵⁾事實の確定の手がかりを往々にして缺いていること、そのことに對する自信のなさ、あるいはこだわりのなさをそれは示している。

二

『蘭裔偶説』『四洲志』とは對照的に、『合省國説』そしてその材料となった『志略』に梁廷枏は満足していたと思われる。彼にとつての理解のしやすさの理由とテキストの状態を知るために、現在の私たちが『志略』を直接眺めることは、自分たちの持っている知識にひきつけてより多くの意味を読み込んでしまうことから、かえって問題をわかりにくくするという面がある。我々は知りすぎているのである。やはり、書き、そしてそれを讀むという行爲を十九世紀三十年代・四十年代のカントンのコンテキストの中で考える必要がある。

十九世紀前半(一八一—一八四四)に、カントン・マラッカ・パタビア・シンガポールを中心に、宣教師によってあらかじめ中國語で書かれた百七十餘りの出版物が刊行されている。⁽³⁶⁾ブリッジマンはその作者の中の有力な一人ではあるが、翻譯者たちとその作業の中心にあったのは、モリソンと彼の *A Dictionary of the Chinese Language* であった。モリソンは自分の直面している翻譯の問題にきわめて自覺的・敏感であり、彼について考えることはブリッジマンの『志

略』のテキストとしての問題をより廣く一般的にとらえることにもなる。ブリッジマンとその著作はモリソンの議論の圈内にそのまま入っているといつてもよい。⁽³⁷⁾

A Dictionary of the Chinese Language は全六冊で三つの部分に分けられている。⁽³⁸⁾

Part I Chinese and English, Arranged according to the Radicals (字典) Vol. I 1815, Vol. II 1822, Vol. III 1823.

Part II Chinese and English, Arranged Alphabetically (五音韻府) Vol. I 1819, Vol. II 1820.

Part III English and Chinese (1822).

六冊のうち五冊までは中英辭典であり、英中にあてられているのはわずか一冊にすぎない。中英部分は中國語を英語で解くという性質上、中國語・中國に對するモリソンの理解・態度を表しており、そこに繊細な翻譯觀をうかがうことができる。

自らの編纂した辭典についてモリソンはことのほか謙虛である。彼にすれば、翻譯にそのまま利用できる言葉を彼の辭書に期待してはならないのである。ここでは適當な文章をさがすための手がかりとなるような言葉の意味が期待できるだけである。詩的な言葉、古典をふまえたいまわしの意味も期待することができない。そのためには中國語に對して從來ヨーロッパ人が捧げて來た以上の努力が必要とされるが、それはただちに達成されるような性質のものではないのである。⁽³⁹⁾ そもそも、ひとつひとつの單語・文を定義するだけで中國語をヨーロッパ人に傳えることができるだろうか。できるとするならば彼の辭書はあまりにもまとまりに缺けるということになろうし、できなければ辭書はまだ十分豊富でないということになる。しかし中國から離れた地に住み、中國人の助けを得ることができない大多數のヨーロッパ人にとって、

ひとつひとつの單語・文の定義しか含んでいない辭書から中國語を學ぶことはできない。ヨーロッパのいくつかの圖書館にあるような、中國に關する著作・論文のコレクションが手近くあり、さらに多くの時間を費せば、あるいはかなりの進歩が期待できるかもしれない。しかし、このようなことは稀れである。⁽⁴⁰⁾

中國語の辭書は中國人の考え方・規範といった文化的背景を含んだ、言葉の包括するあらゆる面を検討したものでなくてはならない。このような觀點からいえば、彼の辭典はまだあまりにも簡略にすぎるのである。なぜなら、中國人はオリジナルな民族であり、その思考のめぐりし方はオリジナルなものであり、ヨーロッパ人のそれとはしばしば大きく食いちがうから、その精神・文化にもとづいて言葉を定義するのでなければ、讀む者は誤解に陥る危険が常にあるからである。その國の歴史・地理・政治・宗教・地方の習慣・考え方に無知であればあるだけ、その言語は困難なものとなり誤解の可能性が大きくなる。中國人にとって自明なことも外國人にとっては掴みどころのないものとなるし、そもそも外國人にとって言葉が中國人と同じ連想を喚起してないのである。それは、椅子を手渡す、皿をもってくる、というようなごく簡単ないいまわしより少しでも高級なものにおいてさえ、すでにそうなのである。⁽⁴¹⁾

異文化としての中國、文化が異なれば言語による世界の區切り方も異なるということをいつてゐるわけだが、これは中國と中國語に獨自の價值・有用性を認めるモリソンの考え方に裏打ちされている。彼から見れば、現在ヨーロッパと中國との間には相互の無關心が存在している。ヨーロッパの事柄は中國にとって重要ではないし、中國の出來事はヨーロッパ人の關心を引き起こさない。商人・宣教師が學ぶのは中國語という不毛の言語であり、苦心の末それを修得してもそこにあるのは中國文學という砂漠である、というようにも言われる。このような言い方は偏見に満ちており、民族的・ヨーロッパ人的感情に従うもので、廣い心で人類を見るといふようなものではない。自らの民族を愛することは同時に他の民族を憎惡することを意味している、と考えるのは誤りである。⁽⁴²⁾

中國語は最も古く最もよく知られた言語のひとつで、それを話す人は人類の三分の一を占める。中國の詩は美しく、歴

史・傳記は示唆に富み興味深い。その道德的な面において中國人はヨーロッパ人に勝っている。可能な限り教育を普及させようとする、若者の教育において自然科學よりも道德的な學問を重んじることが、ヨーロッパが中國に學ぶべき事柄である。中國語を學ぶことは、このような中國により親しみ理解する手助けとなるのである。⁽⁴³⁾

モリソンの辭書の中英部分は言葉の包括するあらゆる面を含んでいるとはいえないが、確かに單なる言葉の定義にとどまらないように工夫がなされている。對應する譯語をいたずらに多く掲げようとするのではなく、説明を充實し、英語との意味の相違・ニュアンスに敏感である。中國人の考えと規範に配慮するという點では、例えば「學」という字の項では、全四〇頁の内、二六頁にわたって學政・科場則例にはじまる、科學についての百科事典的知識が展開されている。⁽⁴⁴⁾この傾向はモリソンの他の著作においても顯著であるが、とりわけ *A View of China* ⁽⁴⁵⁾ はその意味で象徴的な作品である。これはもともと *A Dictionary of the Chinese Language* の一部として分かれたれずにとじ込まれるはずであったが、しばしば参照するのに便利であるように別の著作として刊行されたものである。⁽⁴⁶⁾ ここでは、紀年・地理・官制・時聞・祭祀・宗教の六つの項に分かつて、言葉の背景としての中國を理解するための基礎知識ともいふべきものが述べられている。

モリソンの辭書の中英部分、特にその第二部は、ヨーロッパのシノロジストたちによって全體の中で最も完璧で有用であると稱讃された。⁽⁴⁷⁾ これに對して第三部の英中部分は、宣教師としての彼の仕事、キリスト教・西洋に關する知識を中國語で表現する、に直接かかわるプラクティカルな面を表している。

モリソンにとって中國語への翻譯は二重の作業を意味していた。ひとつは原文の意味を正確に理解しその精神を感じること、いまひとつは翻譯の中で原文の意味と精神を正確に、はつきりと、中國語らしく（もし可能ならば、エレガントに）表現することである。ひとつめの作業は、異教徒（中國人の翻譯者よりもクリスチャンの學生の方が能力があるだろう。後の方は、いうまでもなく母國語に譯す中國人の方が勝っている。そして、このふたつの資質を多少なりとも満足

な形で一人の個人の中で兼ね合わせるのは困難である。⁽⁴⁸⁾

モリソンは第二の作業よりも第一の作業の方が大切であると考えていた。翻譯が中國語として流麗であつたとしても意味の誤解を償ふことはできないが、文體のある程度の粗さは意味までも破壊しないのである。實際、商業的・政治的な文章の翻譯の経験からいっても、外國人による不細工な翻譯でも、口頭で傳えた場合よりもはつきりと中國人の生徒は原文の意味と精神を理解することができるのである。だから、神の啓示の意味をよりよく傳えることができるのは、きれいで中國語らしくはないが、正しい判斷力と中庸を得た學識をもつた宣教師による翻譯なのであり、異教徒の中國人が譯したできあいのものではない。翻譯に際して中國人が異教徒的な觀念に影響されることはないが、さらにその彼ら自身の觀念にびったり來なければ、原文の意味を正すふりをして彼ら自身にひきよせるということさえするのである。原文の意味に忠實であること、明確・簡潔であること、まれにしか使わない言葉・古典をふまえたいい方よりもあたりまえのいい方を選ぶこと、つまり中國の哲學・宗教でよく使われるテクニカル・タームを避けることが、翻譯の際のモリソンの心得であつた。⁽⁴⁹⁾

中國語らしさ、中國人にとってのわかりやすさをことさらに犠牲にするのは、そのわかりやすさというのは實は原文にはなかつた中國語固有の意味が翻譯を通してまぎれ込むことを意味するからであらう。⁽⁵⁰⁾ 中國語への翻譯であるから、中國語という道具を使って英語の意味を描寫するということになる。その時モリソンは中國語がいわば無色透明で、英語の意味をそのまま寫しだすただの道具であつてほしいと望んだ。しかし實際には、ともすれば中國語はその中國語としての意味を強く主張しながら英語の意味の中に居すわりがちであつた。だからこそ彼は原文に忠實であることを何度か主張するのである。モリソンの鋭敏な言語觀は、當時英語の觀念を十分な形で中國語で表現することが非常に困難な環境にあつたことを感じ取つていたのである。

中國語にない新しい概念を説明する時は、中國語のテクニカル・タームが入り込むことにとりわけ神經質になる必要が

ある。その時は文脈に訴える。新しい概念になった言葉がいつも同じ文脈に埋め込まれていれば、讀むものはやがてその意味を理解するようになるということが當時主張されていた。⁽⁵¹⁾だが、中國語らしい表現、テクニカル・タームを避けようとすれば、文章はどうしてもまわりくどく説明的になる。モリソンの翻譯に對する中國人の印象は、中國語らしいとはとてもいえない (far from being idiomatic)。⁽⁵²⁾餘計な言葉、不必要な繰り返しが多く、意味をあいまいにしている (a great number of redundancies and tautologies, which render the meaning obscure)。⁽⁵²⁾中國の書物の通常のスタイルとは對照的に、餘計な言葉があまりに多く、それが外國語的な表現様式を多く含んでいる (exceedingly verbose, containing much foreign phraseology, contrary to the usual style of our books) というものであった。⁽⁵²⁾

中國語にはない英語の新しい概念を翻譯するというはじめての試みの中では、中國語らしさを犠牲にしても原文の意味に忠實に、というモリソンの意圖にもかかわらず、結果から見れば、それ以前の問題としてモリソンの力の限界のために、翻譯という形に入ることすら困難な場合が多かったように思われる。あるいはそれは彼の言語感覚があまりにも繊細で誤りを恐れたからかもしれない。彼の辭書の中で英中部分は一冊にとどまり、中英部分とは不釣合な、わずか四八〇頁を與えられているにすぎない。この量的な貧弱さは、英語らしい概念、中國語で表現しようとしたとき中國語獨自の概念が入りそうなものをあらかじめ省いてしまった当たり障りのなさを表している。中英部分の解釋の周到さとは對照的に、英語獨特の概念はここで解き明されることはない。

それ以上にモリソンの辭書のこの部分の含む問題は、英語を中國語で解くというスタイルであるはずのところに、むしろ中英の部分のスタイルが色濃くあらわれていることにある。Collegeの項では、イギリスの大學制度についての解釋は加えられず、説明されているのは中國の制度である。

A national college at Peking 國子監 kwǒ tsze kéén, 國學 kwǒ hé

A first college in the empire 翰林院 han lin yuen

Collegiate of the kwǒ-tsze kéén 監生 kéén sāng

Collegiate of the Han-lin-yuen, 翰林 han lin

(中略)

The highest literary person in each province is called 學院 hé yuen. He is appointed by the emperor and attends at the examination of Candidates in each district, as well as at the triennial examination at the capital of the province.

同じように、Board では六部が、Crime では十惡が説明されている。モリソンが集めていたのは中英部分と同様に中國語の例文であったことがわかる。⁽⁵³⁾モリソンの辭書は宣教師たちが中國語で著作をするときの手引きとされたであろう。彼らがモリソンのような敏感な言語の感覺を持ちあわせていなければ、辭書のこの部分の癖に強く影響されたであろう。その結果は、モリソンが最も警戒した、原文の意味から離れた中國語らしさであったと思われる。ここに集められた單語・フレーズは大きな手助けになるであろうが、中國語の知識のない者が見だしに掲げられた英語を参照するだけで、中國語でその思想を表現できるなどということはできない、という序文の中のモリソンの言葉はこのための自信のなさであろう。⁽⁵⁴⁾

文化が異なるかぎり言語による世界の區切り方も違ふ、だから似たような感じの言葉でも英語と中國語では意味は大きく異っているはずだというモリソンの言語觀はきわめて繊細なものであり、同時に現在の私たちからすれば陳腐とすらいえるほどに馴染みのものである。それは現在の我々の常識的な言語觀・翻譯觀であろう。翻譯に對するブリッジマンの構

えもモリソンと似たものであったといつてよい。中國は學問的研究にとって最も興味ある對象であると彼は認めていた⁽⁵⁵⁾。『A Chinese Chrestomathy in the Canton Dialect』の中でなされた彼の譯文(中文英譯)と注解はモリソンにおとらず周到である⁽⁵⁶⁾。だが、アメリカ合衆國の事情を中國語で表現した『志略』ではやはり力量のなさが明白であり、彼の纖細さもしばしばモリソンが最も怖れた安易さにあまりにもたやすく譲っているように思われる。時には苦痛を感じさせるほどつきつめたモリソンの言語觀はブリッジマンには見られない。Society for the Diffusion of Useful Knowledge in China でブリッジマンとギョツラフ(Karl Friedrich August Gutzlaff, 一八〇三—一八五一)は緊密な協力者であった。ギョツラフの翻譯が、モリソンが怖れた中國人にとつての分り易さを布教のための積極的な利點とみなすようなものであった⁽⁵⁷⁾ことを考え合わせれば、あるいはブリッジマンも『志略』の意味のあいまいさをさほど氣にかけていなかったのかもしれない。

三

『合省國說』の序はアメリカ合衆國の體制に對する素直な驚きから始っている。これまで『海國四說』に言及されることがあったとすれば、それはほとんどこの序に見られる意識の高さにふれるためであったといつてよい。

六合の内外、中國から最果ての地に到るまで、ひとりの君主を戴いて賞罰禁令を統べないものはない。禪繼與奪の違いはあるけれども、君が上に治め民が下にしたかうというのは同じである。ところがアメリカ合衆國だけが異なる。畏るべきは民に非ずや、⁽⁵⁸⁾という書(大禹謨)の言葉が偽りでないことをこれで知るのである、とした後、その驚きの由來がいくつかに分けて述べられる。

・建國の始めから一國の賞罰禁令をすべて「民」が決議し、その後人にを選んでこれを守らせる。まず「國法」があ

り、その後に「統領」がくるのであり、その逆ではない。「法」というのは「民心の公」である。

・「統領」は期限を切って易える。優れた「統領」であっても、そのために「法」を変えて任を續けさせることはしない。その地位にいずれも権力を恣にして退かないということはできないし、どのような形であれ「法」を犯して取ってかわるということもできない。その進退はすべて「民」に公けにされ、その上で「民」も自らの選んだ「統領」の命にしたがうのである。これは「郷舉里選」の意を持守し、確かな據りどころがないと思われてきた、所謂「視聽、民よりす」ということを實證してみせたのである。このようにすれば、四年という限られた任期のある「統領」は黨を樹てることも私事を濟すこともなく、「法」を遵守し、四年の間に全力を竭し、「民」に良い評判をのこすように心がけるだけである。

・だが、このような「開闢より未だあらざるの局」は「地」「時」「人」というアメリカ合衆國にしかない三つの偶然の事情がそろって始めて可能であつたこと。⁽⁵⁹⁾

どれほど未熟なものであつたとしても、法に對することのほかの重視、君主制の否定、民主主義の萌芽というものを、私たちはこの中にたやすく讀み込むことができる。しかし、アメリカ合衆國に對する序の梁廷枏の認識が彼にとってどのようなものであつたかは、おのずから私たちの解釋とは別のところにある。それを知るためには、『志略』の記述を彼がどのようにさばいていったかを、序に對應する『合省國說』卷二の記述の中で慎重に見てみなければならぬ。⁽⁶⁰⁾

『合省國說』の序の末尾には、いかにも風變りであるが、興味深い言及がある。それはブリッジマンの『志略』の記述のあり方についてのものである。

ある者はこのように言う。西洋は中國から遠く離れて、制度（文化）も大いに異なる（西洋遠隔中夏、文制迥殊）。ところが（ブリッジマンの『志略』では）「省」「府」「州」「縣」という言葉を使い、これは中國のいい方を模倣している。アメリカ合衆國の十三省が順に置かれはじめたのは、アメリカ合衆國が入貢しカントンでの貿易を許されるより前の事であり、中國が前代に「道」を「省」と改めたことを聞いたはずもない。一體どのようにして模倣したのか、と。（このある者は）このところからアメリカ人自身が記した『志略』の信憑性をあやぶむのである。しかし「熱爾瑪尼亞國」が「合勒末祭亞」を「省」としていることは『皇朝職貢圖』に記載があるし、他に「細亞州」に「嘉略省」「弗俗府」があり、「歐羅巴州」に「嘉亞省」、「利末亞洲厄日多國」に「孟斐府」があることは、南懷仁の『坤輿外紀』に見える。だとすれば「省」「府」「州」「縣」という呼稱はアメリカ合衆國から始まったわけではないのである。どうして『志略』の記述が信じられないことがあるうか。

この一文は、ある者の論難を紹介し、それに對して梁廷枏が答えるというスタイルをとっている。やや舌足らずに終わっているが、梁廷枏がいたいのは、中國から直接學んだわけではないかもしれないが、『皇清職貢圖』や『坤輿外紀』中に見える諸國を通して、中國の行政區分をアメリカ合衆國が模倣した、ということであろう。『合省國說』巻一でも、中國が省に分かつて統治しているのをアメリカ合衆國が知り、自らの國でも省と名づけている、と繰り返して述べている。

この一文の奇妙さは、私たちにとつての翻譯の言語の問題が梁廷枏には當然の問いになっていないことに由來している。『志略』中の「省」「府」「州」「縣」という語は翻譯の作業としてたまたま選ばれているのであり（例えばStateの譯語として「省」をあてるといふように）、模倣というような事柄ではない。その翻譯にはモリソンの氣にかけた言語の問題がつきまといっており、それは『志略』に對しても本質的な問いをなしている。だから問われるべきなのは、例えば「省」という譯語を、たがいの背景について何の説明もなく State に素朴に對應させたのは、それほど差し障りのない例だと

しても、やはりブリッジマンの輕率ではないか、というような問題であるはずだ。實際、「文制迥かに殊なる」とあるからには、ある者がこの一文で問いかけているのは、我々から見れば文化が異なれば言語による世界の區切り方も異なるという事なのである。

だが梁廷枏にとっての原理はこのような問いとは別のところにある。そこで問題とされているのは、西洋のAが中國のBに由來するということ、ただそれだけである。だからこそ、その模倣がどのようにして可能であつたかが熱心に解説されるのである。私たちにとつてモリソンの言語の問題で語られなければならないはずの事柄が、西學源出中國說で表現されてしまうのが不思議な印象を與えるのである。

十九世紀前半のカントンは、中學と西學との意味の區分を嚴密に表現しようとしても難しい環境にあつたこと。だがそれ以上に、そのような區分への意志が問われていないという意味においては、梁廷枏は中學と西學とを區分しようとしていないし、また區分されてもいない。だから「西洋のAが中國のBに由來する」と彼がいつた時、その「西洋のA」も「中國のB」も自身の意味に即して表現されない以上、そのいい方の表面的な明瞭さとは對蹠的に、それらを區分しないままに考えが廣がっていくことを意味している。逆に「西洋のAが中國のBに……」と語られる時、モリソンの問題を梁廷枏が自分なりの方法でさばいていることをそれは示している。

ある者の言葉として、あるいはそれを裝つた自問の言葉として「文制迥かに殊なる」といつているかぎりにおいて、モリソンのような問題を梁廷枏は心得ていたのかもしれない。しかし彼はそのようなことは問われていないと決斷するのである。時間をかけて意味を待つという林則徐の翻譯作業に見られた態度も梁廷枏にはない。彼は、言葉の意味だけを直接、そしてただちに求めている。

序に述べられた、アメリカ合衆國の體制についての認識に對應するのは卷二中の記述である。卷の始めから獨立のいきさつが語られ、ボストンティーパーティー事件と課税のくだりまで來たところで次のように述べられる。

(A) 酋、民の約に違わざるを以て、怒りを總制に遷し、遽かに前に給するところの印を收めんと欲し、命ずるところの官も亦た解體す。新地の舊俗、凡そ出づること省學館よりし(士子に進士・舉人あり。皆、稱して衿と曰う。語は後に詳し)、及び老いたる者、中國の故事に沿いて合わせて衿者と稱す。事あらば則ち先ずその人を公けに集め、會議せしめて、而して官これを定む。乾隆三十九年(西洋諸國千七百七十四年)に當たりて、諸省各々その衿者を以てみな費拉地費に集め、兵を止むるの策を會商す。〔ハ〕内は雙行注〕

イギリス國王(酋)の仕打ちに對してフィラデルフィアで會議をもったことを記したこの一文に該當する『美理哥合省國志略』の中の記述は、

(ケ) 乾隆三十九年、新國各部の衆衿者、費治彌に至りて會議す。

とあるだけである。⁽⁶¹⁾語調とその唐突さから見て、「新地の舊俗……、官これを定む」の部分は、『志略』中の「衿者」の語を襲うにあたって、梁廷枏が特に補い説明を加えたものであることは疑いない。わざわざ「中國の故事に沿いて」と斷っているところから見て、翻譯語としてたまたま選ばれたという以上の意味が『合省國說』の「衿者」の語に込められていることがわかる。

『美理哥合省國志略』にはいまひとつアメリカ合衆國の學校教育についての記述がある(原文は註に掲げた。(イ)と略稱する。⁽⁶²⁾それは本来、先に舉げた『美理哥合省國志略』(ケ)の記事とは遠く離れた關係のないものである。この記事を梁廷枏はやはり『合省國說』卷二の中で、次のようにふたつに分かつて自分なりの記述に整え、それによって『合省國說』(A)の「衿者」の記事と呼應するようにしている。「衿者」のイメージを彼がどのように形成しているかを、そこに窺うことが

できる。

(B) その立學廣教の法は郷より以て國に達し、各々その等差を異にす。郷ごとに學一所を設け、歳ごとに男婦の學ある者を聘き之が師となす。その經費は捐ぜらるること富室よりし、郷に富者なきは迺ち隸する所の省の官に假りて之を助く。男女に論なく、三四歳にして胥^{すべ}て學に就かしむ。分かち教うるに書算地理經史を以てす。女師は則ち並^{あわ}せて刺繡を教う。惟だ縣學館のみ師を延くに經費多くは學童の致す所の束脩に資せらる。その建設は則ち或いは捐ぜらるること官よりし、或いは衿者由り請を得て而して建つ。定章なし。省學館は則ち或いは捐ぜられ、或いは建つるに會項を以てし（會を設け、その實息を以て之を建つ）、而して公に助成さる。館ごとに事を司る者數人を設け、その條約を定めしめ、同學の者に告げて之を守らしむ。別に大學館あり。業とする所は三、曰く聖文（聖文、説は後に詳し）、曰く醫治、曰く律例規條。〈以下省略〉（一）内は雙行注」

(C) 儲養するところの人才は一に學館より出づ。歳ごとに郷縣の學生を集めて之を考試す。試は例として一場に止む。取録する者は省學に入るを得。取に與らざる者は仍たその郷に還りて肄業し、明年を待ちて再考す。省學の課習は限るに四年を以てし、期の滿ちたる者は舉人と爲す。散館もて舉られ、官と爲り師と爲るべし。或いは各々學ぶ所に隨いて士農工商と爲り、皆各々その業を終えしむ。大學館はただ省學の期滿ちたる者のみ與かるを得。肄習すること三年なる者は進士と爲す。次を以て升り、必ず郷學より始む。

『合省國説』(A)の記事の「士子に進士・舉人あり。皆、稱して衿という。」と説明した雙行注の「語は後に詳し」は、直接には(C)の記述を指している。

『合省國説』(B)の記事は、まず「立學廣教の法」とあり、さらに地方の官府あるいは有力者による社會福利を記した記事が前後にあることを考え合わせれば、『美理哥合省國志略』(I)の教育（それは西洋近代的なものだが）としての記述により近いといえないこともない。しかし、そこには「その立學廣教の法、郷より以て國に達し、各々その等差を異にす」とあるように、「郷學（館）」から「大學館」までを縦に上昇していく明確な階層として理解していることが窺える。

『合省國説』(C)では同じことを「次を以て升り、必ず郷學より始む」と表現している。『志略』の中でアメリカの行政区分を「省」「府」「州」「縣」と表現したことは、ブリッジマンにとって大きな意味をもっていなかったであろう。だが梁廷枏がそれを中國の行政區劃と異ならないものとしてアメリカに適用したとき、各々の單語はさしあたりの代替という以上の附隨するイメージを巻き込むことになる。『美理哥合省國志略』(I)では「郷學館」「縣中學館」「會城中學館」「大學館」の四つは、本來直線的な階層をなしていない。「郷學館」「縣中學館」「會城中學館」は並列の關係で考えられており、直接の上下關係があるのは「會城中學館」と「大學館」だけである。「郷學館」と「縣中學館」は、前者が貧富を問わないのに對して後者が「束脩」を必要とし規模のより大きなものであること、さらに「會城中學館」は郷・縣の「學館」と性格をかなり異にし、入學の際に試験に合格することを必要とし、四年の修學期間を経た者だけが「大學館」に進むことができること、というようにそれらは互いに性格を異にし選擇を許すものとなっている。

このような『志略』(I)の記事を階層的なものとして讀み込んでしまうのは、中國の制度と分かれたれないものとして理解された「省」「府」「州」「縣」などの言葉に科學の學校試・科學試のイメージを重ねてしまうことによるだろう。『美理哥合省國志略』(I)が西洋近代の學校教育の紹介を意圖していたのに對し、「學館」は登用のための「人才」を「儲養する」ところであるという色彩が『合省國説』(C)の記事には濃い。『合省國説』(C)と同様に、『美理哥合省國志略』(I)の中でも「進士」「舉人」という言葉は確かに使われている。それは「會城中學館」「大學館」に入學、あるいはそれを修了した場合に得られる資格と名譽を印象づけるためにブリッジマンがアナロジーとして用いたものと思われるが、『美理哥

『合省國志略』の文脈の中ではそれはあまりにも不自然である。しかし、科擧に近いものをイメージした『合省國説』の記事では、「進士」「舉人」の語は無理なく文脈に埋め込まれ、相應の意味を擔うようになってゐる。もともと『合省國説』(B)・(C)の記事で實質を伴った「課習」に言及している以上、梁廷枏自身が深く關つていた廣東の書院のイメージ(學海堂というよりも、從來からある科擧受験のための書院、例えば粵秀書院、越華書院)を「學館」に投影していると思われ、その意味で現實の科擧制度とはやはり微妙に異なる。

『美理哥合省國志略』(ア)と(イ)とは本來、節を異にした關連のない記事である。また、(ケ)の「衿耆」、(イ)の中の「進士」「舉人」の語に、特別の連關を思わせるような意味は込められていない。この(イ)の記事を梁廷枏は科擧に類似したものとして解釋する(『合省國説』(C))。そのため「進士」「舉人」の語は、彼にとつて馴染みの意味をもつことになり、『美理哥合省國志略』(ア)・(イ)の記事をそのまま襲つたならば本來互いに關係のないはずの『合省國説』(A)と(C)の記事が、「衿」即ち「進士」「舉人」として呼應することになる。⁽⁶⁴⁾『合省國説』卷二「凡そ出づること省學館よりし、及び老いたる者、中國の故事に沿いて、合わせて衿耆と稱す」「士子に進士舉人あり、皆稱して衿と曰う」という記述はこのような操作で生まれたものであると思われる。

アメリカ獨立運動の際の指導層が中國清代の紳士層(梁廷枏もその一員である)のイメージでとらえられ、フィラデルフィアの會議に續く『合省國説』の建國の記事を梁廷枏は非常なリアリティーをもつて記述したことを窺うことができる。これは、序の有名な部分に對應する一節である。

(D) 華盛頓、隨ちに兵柄を解き里に歸る。その時、戰塵甫めて息み、國事なお散として統紀なし。旋ちに五十三年(西洋諸國千七百八十八年)春より首夏に迄(按ずるに即ち中國の十一月より十二月に至るなり)各省の衿耆を集め費拉地費に會議し、先ず華盛頓を起てて宜しきに隨いて權理せしめ、相ともに立國の規條を議定す。國に行なう者を國例と曰

い、諸省に行なう者を省例と曰い、府例と曰い、州縣例と曰い、司例と曰う。議し訖り、仍た各々還りてその省に告げ、參差あるを無からしむ。明年再び集い、しかる後常例とす。此に至りて乃ち永えに定む。國を通じて一統領を設け、また一副統領を設け之が佐と爲す。各省のことを總理せしめ、四年を遇れば則ち別に擧げて以て之に代う。是を一次と爲し（正副同じ）、その衆の悦服し別に議するを欲せざる所と爲る者は再び四年を留むるを得。賢と雖も八年兩次以外を逾うる能わず。就ち華盛頓を以て眞に即きて初次の統領と爲す。（一）内は雙行注

梁廷枏のイメージする「衿耆」が「立國の規條」（序の「法」に相當する）を定め、その後で任期のある統領の制度を決定したのであるが、法にのっとり公議するこの「衿耆」は「統領」の選任だけでなく「議事之民」（私たちのいう議員であると思われる）、地方の行政官をも選ぶ。逆に選ばれた者は就任にあたって、法にしたがい民意に背かないことを誓うのである。⁽⁶⁵⁾

このように述べて、梁廷枏は郷舉里選を想起する。しかし、これはアメリカ合衆國の體制を結局郷舉里選で理解してしまふこと、すなわち西學を中學のカテゴリーで解釋してしまふことを意味していない。確かに彼は郷舉里選を口にするが、これはアメリカの體制についての新しい認識を得て、それを郷舉里選とふと呼んだのであって、彼の場合あらかじめ郷舉里選の確固としたイメージがあった譯ではない。梁廷枏はそうはしなかったけれども、以後西洋からの知識を得るたびに、そして中國の古典の記述に反求するたびに、郷舉里選のイメージと内容を豊かにしていくこともできるのである。ここにあるのは何よりも驚きと始まりの感覺である。序の語調自體が彼にとって事態が新しいものであることを示している。

十九世紀前半のカントンで西學源出中國説はすではやりの考え方であった。⁽⁶⁶⁾道光のおわり、學海堂の學長陳澧と鄒伯奇は西學が『墨子』に源をもっていることをいちちやく「發見」する。⁽⁶⁷⁾それに先立って『墨子』に對して彼らが整った知

識をもっていたわけではない。彼らの目にした西學の中にかつて讀んだ『墨子』の感觸を漠然と感じとった、あるいは『墨子』を繙いているときに、そこに西學を讀み込んだのである。『墨子』の解釋は西學によっても豊かにされていく。亂暴ない方をすれば、西學を西學として獨立して記述できないということは、逆に中學を中學として、西學と區分された形で認識することもできない場合があることを意味している。聲高に主張することはできても、何が中學であるかは彼らには説明できないこともあるのである。中學自身も西學によって發見され豊かにされていく。

梁廷枏が『合省國說』の序で見せた驚きは、アメリカ合衆國の民主制を、不十分な形ではあるが、それ自身に即して客觀的に理解した驚きではなく、自分を含む社會とある點で區別することのできない社會が、公議によって君主制を否定し、法を體制の根幹に据え、指導者を選び、任期にしたがってとりかえることを認識した驚きであると思われる。うがった見方をすれば、序文の中で驚きを見せながら、あわててそれをアメリカ合衆國の特殊な事情によるものだと否定し、さつたのは、可能性としては中國でもそれがありうると認識したからかもしれない。だが彼は鄉舉里選を思い起こしたところで躊躇し、それ以上は進まない。それが「ただ今を變じて古に反らんと欲し、未だ好んで井田封建の故智を談るに局^{かぎ}らるるを免がれ」ない顧炎武に對する非難の感情に由來する⁽⁶⁸⁾のか、あるいは總序の末尾で彼が思わず洩らしていたように、自分の行った方法と作業に不確かさがあることを認める分別があつたためか、そのあたりは憶測の域に入ってしまう。

四

私たちは自己と他者とを區別することに慣れている。中學が何であり西學が何であるかをそれ自身に即して認識すると、すなわち中學と西學の區分を前提として、そこにはじめて私たちにとつての翻譯という作業が始まる。少なくとも表面的には西學を厳しく斥け中學を主張する西學源出中國説は、私たちにとつて非常に理解しやすいものである。その感情の強さにたやすく眼を奪われてしまうのである。そのとき私たちは彼らを自分と同じものだと見ていることになる。彼ら

は自己（中學）と他者（西學）とを意味の上でまぎれない形で區切り、對象を離れた位置から描寫し分析しようとしていると信じている。

しかし梁廷枏たちにあるのは西學源出中國説だけであり、中學と西學の意味上の區分という事柄は必ずしもそれに伴っていない。與えられた材料から見て嚴密な區分ができるような環境になかったということ以上に、私たちにとつての翻譯の問題が彼らにはない。中學が何で西學が何であるかということを必ずしも説明しようとはしていないのである。モリソンのような敏感な差異の感覺に對應するのは、差異の感覺が鈍いとか、差異よりも同質性を、ということではなく、そのような差異の考え方そのものを當然とは考えない態度なのである。

彼らの感情的な議論は多くのことを中學に由來すると主張するけれども、その區分が自明でない以上、それはすでにある中學でも西學でもない、何か新しいものであると考へた方がいいだろう。彼らの文章で際立っているのは何よりも驚きと始まりの感覺である。そのこと自體、彼らの感じているものが、すでにある何かではないことを示している。意味はこれから生まれてくる。自己と對象との間に嚴密に區分が立てられていないということとは、またそれが自分の中に對象を無理のない形で作りあげるような試みであることを示している。西洋のあるものは對象として冷靜に分析されているのではなく、自らの内の問題として切實に感じとられている。

馮桂芬の『校邠廬抗議』は、大がかりな改革を構想したものとして十九世紀の後半に幾度となく取り上げられた書物である。その自序の中で、改革のプランの骨子が「三代聖人の法」に背かないことを主旨としていると馮桂芬は述べ、その例として「郷學里選の法」「分田制祿の法」などを擧げている。一方、「製洋器議」の中で彼は、中國が西洋に及ばない四つの點（「人に棄材なし」「地に遺利なし」「君民隔てず」「名實必ず符す」）を率直に認めている。これは體制の根幹に關わる改革を必要とする問題であろう。だがそれは西洋に學ぶ必要のないものだとは彼は斷定する。反求して「三代聖人の法」に尋ねればそれでいいのである。結局『校邠廬抗議』の中で西洋に學ぶべきだとされたのはわずかに「船堅砲利」にとどま

り、残りのほとんどは「三代聖人の法」を敷衍することに費されている。

學ぶべき方法としての西學と中學の区分はここでも明確であるように見える。だが『校邠廬抗議』の稿本に對する検討によれば、馮桂芬が「三代聖人の法」に學んだとしている「公黜陟議」は、刊本では故意にその形跡は抹消されているが、アメリカ合衆國の大統領制・選舉制度についての何らかの情報を意識したものであることがわかる。⁽⁶⁹⁾彼のいう「三代聖人の法」も西學と截然と區別された形で認識することができるとであったのだろうか。梁廷枏に見られたような問題がここにもひそんでいるように思える。

いうまでもないことだが、彼らが常に區分を立てようとしなのではない。彼らは時に、好ましいと思われ時に、とりわけそうするのである。同じ『海國四說』の中の『耶穌教難入中國說』では、『合省國說』と對照的な作業を梁廷枏は行っている。また所詮嚴密な意味での翻譯などではしなないというような原理的な問題にこだわる必要もないだろう。それが十分にはできないとしても、私たちはより満足できる方向に執着するが、彼らは私たちに比べてより自由である。その自由さの中で、個人的な關心や自らの社會に對する見方を彼らは織り込むことができる。彼らと私たちの間には程度の差があり、それを小さく見積ることは清末の思想の興味深さを削ぐことになるだろう。

梁廷枏の置かれた環境は單純なものであった。カントンシステムが開かれたばかりの廣州で彼の得ることのできた情報は單調で貧しいものであった。そして何よりも彼には分別があった。しかし以後、情報は確實に多様で豊富なものになるし、彼の分別を越えて、彼の行ったような作業をより巧妙により遠くまで押し廣げていくこともできる。康有爲・譚嗣同の文章を読むときに私が受けるのは、要するにそのような感覚である。

それを中學と西學の融合・折衷といつてはならない。そういった時すでに中學と西學はあらかじめ分りきったものとして考えられ、彼らの描いた像はつなぎあわされた退屈なものとなる。區分されないというとき、私たちはその思想の内にとどまりつづけようと努めることを意味するが、融合といった途端、私たちは外に出てしまう。事柄はそれほど微妙で繼

續の意志を必要とするように思える。

あるいは、このような彼らのやり方は病んでいるといい方もできるかもしれない。だがそういうのならば、私たちの方法もまた別の意味で病んでいるのだろう。そのようなことをいうよりも、彼らの方法の描き出したものの美しさと展開の力を知るために、その理解された意味の廣がりや丹念に辿っていくべきであろう。

清末の思想全體については、いくつもの考え方が可能である。西學の導入に注意することもできるし、それを嫌えば中學の動向に氣を配ることもできる。前者の場合は時間の流れに沿った西學の導入の濃度が目安となるであろうし、後者では先立つ時代とのつながりということにまず關心が持たれるであろう。これらはいずれも鳥瞰的な強い立場であり、それは確かにそうとしかいいようのないものである。これらの見方が思想の連續・發展に強い力を持つことができるのは、それが意識的であるか無意識であるかは別として、ひとつには中學と西學の區分を明確に定めているからであろう。

そのような區分が必ずしも明快ではないという見方を選ぶならば、別の行き方もあるように思う。あまりに小さくて弱い立場かもしれないが、ある期間（象徴的にいえば、アヘン戦争期から、『新民說』の中で古人の奴隸になつてはならないと梁啓超がいうまで）の中の、思想の發展ではなく、ここで見てきたような個々の思想自身の廣がりだけを丹念に辿っていく立場である。それは清末の思想史ではなく、ただ單に清末の思想というべきものである。この時代の思想の最も美しい部分は、むしろ積極的に時間の流れに對する意識を失うことによってその豊かさを知ることができるのではないか。そのとき前後の時代のコンテキストは私たちに、よつて適宜参照されるという形で現われるだろう。

しかし彼らの記したことの意味を十分に知るためには、なによりもその文脈を明らかにするだけの豊富な材料がなければならぬ。その意味では豊かな可能性を感じると同時に、私たちの作業については悲觀的な方がいいのかもしれない。

註

- (1) 「西學源出中國說」という言い方は、全漢昇「清末的「西學源出中國」說」(『嶺南學報』第四卷第二期 一九三五)で始めて用いられたものだろうか。このような考え方についての解説は多いが、まとまったものを一つ挙げれば、孫廣徳『晚清傳統與西化的爭論』(臺灣商務印書館 民國七一年)がある。

- (2) 京都大學附屬圖書館所蔵の道光刊本を使用した。四「說」がすべて揃った道光刊本は北京圖書館にも收蔵されている。胡逢祥氏は、技術的な修訂を経た咸豐刊本があるといっておられる。「梁廷枏史學研究」(吳澤主編・袁英光選編『中國近代史學史研究』華東師範大學出版社 一九八四 所收)。
- (3) 本論文でいう『海國圖志』は、すべて道光二十四年刊の五十卷本を指している。天理大學附屬天理圖書館所蔵のものを利用した。

- (4) 村尾進「梁廷枏と『海國四說』」(『中國—社會と文化』第二號 一九八七) 一六三—一五頁。

- (5) 『海國圖志』敘。

- (6) 總序の末尾の『百夷傳』『日本風土記』に對する高い評價にどれほどの意味が込められているかはよくわからない。現在の私たちから見ても兩書的情報は整っているが、『百夷傳』が、梁廷枏がいうように實地見聞の作であるのに對して、『日本風土記』は先行の著作を集大成したという性格が強いようである。京都大學文學部國語國文學研究室編『全浙兵制考附日本風土記』(京都大學國文學會 昭和三十六年)、錢

古訓撰・江應校校注『百夷傳校注』(雲南人民出版社 一九八〇)の解題參照。

- (7) 梁廷枏は『蘭荷偶說』の中で、『海國圖志』中に引かれた材料の記載の相互矛盾を指摘し、それが結果的に『海國圖志』の資料集的性格を印象づけることになっている。村尾前掲論文 一六七—一八頁。

- (8) 『廣東海防彙覽』はその校勘・改削にあたつて吳蘭修・曾釗・林伯桐・饒克中の協力を得ているが、本來梁廷枏の「一手所爲」であつた。『粵海關志』は、梁廷枏を總纂とし、曾釗・方東樹が同人として協力した。この事情については、梁廷枏『藤花亭駢體文集』(中山圖書館所蔵) 卷一「廣東海防彙覽後序」、卷一「書局擬恭進粵海關志表」に詳しい。

- (9) それぞれ使用したテキストは次の通り。

『海錄』 「海外番夷錄本」(馮承鈞氏の注本

『海錄注』中華書局 一九五五の

馮氏自身の序參照)

『(道光)廣東通志』 道光二年刊本(京都大學人文科學研究

所蔵)

『廣東海防彙覽』 清刊本(東洋文庫所蔵)

『粵海關志』 廣州龍藏街業文堂刊本

道光二十五年端六序刊本(國立國會圖

書館所蔵)

『夷氣聞記』 清代史料筆記叢刊本(邵循正校注 中

華書局 一九八五重印)

『合省國記』は未見。註(33)参照。『海國四説』については、註(2)参照。

- (10) このあたりの事情は、註(8)で掲げた「廣東海防彙覽後序」「書局擬恭進粵海關志表」および、梁廷枏『粵秀書院志』(北京圖書館所藏)序、『越華紀略』(中山大學圖書館所藏)序、『東行日記』(同上)序、に詳しい。

- (11) 『合省國説』卷三。

- (12) 『海録』については註(9)『海録注』馮序、井上裕正『海録』小考」(『奈良女子大學文學部研究年報』第二九號 一九八五)に詳しい。

- (13) 『合省國説』序。

- (14) 宣教師の著した著作については、*A. Wyle, Memoirs of Protestant Missionaries to the Chinese* (Shanghai, 1867) を参照するのが便利である。研究書としては、*Suzanne Wilson Barnett and John King Fairbank eds, Christianity in China, Early Protestant Missionary Writings* (Cambridge, Mass., 1985) がある。當時の宣教師をめぐる諸事情については、李志剛『基督教早期在華傳教史』(臺灣商務印書館 民國七四年) が包括的な記述をしている。

このような宣教師たちの漢文著作のカンテンにおける流布を最もよく反映しているのが『耶穌教難入中國説』であるが、書名の引用が杜撰であるために、何種類ほどの著作を利用したのか、にわかに定めない。また『粵道貢國説』は、『粵海關志』編纂の際に閲覧した檔冊を利用しており、この

ような翻譯の事情とは直接関係がない。

- (15) 英語名 *Eastern Western Monthly Magazine*. 最も早い時期の中文雜誌(月刊)で、道光十三年から十七年まで廣州で刊行された。譚卓垣編『廣州定期刊物調查』(一八二六—一九三四)、『香港龍門書店 一九六五 原載「嶺南學報」第四卷第三期 一九三五』九頁。ギョッラフ(愛漢者)の編集。東洋文庫にその一部分が収められており、例えば道光癸巳(一八三三)七月發行のものには、「序」「東西史記和合」「地理」「新聞」「東南洋並南洋圖」の五つの記事が掲載されている。「東西史記和合」以下の三つの記事は連載で梁廷枏にとって貴重な情報となったであろう。『合省國説』にはさしたる痕跡は認められないが、『蘭荷偶説』卷一は「東西史記和合」の影響を受けているように思われる。

- (16) 『合省國説』卷三に「體裁・内容・發行間隔についての記載がある。これはおそらく英字新聞であり、梁廷枏によって直接そこから情報を讀みとることの出来るようなものではないが、原物を彼が實際に見たことがあることがわかる。

- (17)ブリッジマンの生涯については、Eliza J. Gillet Bridgman ed, *The Pioneer of American Missions in China, the Life and Labors of Elijah Coleman Bridgman* (New York, 1864) が、最も詳細である。作品のリストは、註(14)のワイリーの著作に掲げられている。同じく註(14)のバーネット、フェアバンク共編書にはブリッジマンと『志略』についての論文が収められている (Fred W. Drake, "Protestant Geography in China: E. C. Bridgman's Portrayal of the

West" in S. W. Barnett and J. K. Fairbank eds., *Christianity in China, Early Protestant Missionary Writings* (Cambridge, Mass., 1985)°

(18) 『合省國説』序。

(19) Wylie, *op. cit.*, p. 70. *Catalogue of Protestant Missionary Works in Chinese*, Compiled by John Yung-Hsiang Lai (Boston, 1980), p. 45.

(20) *Ibid.*

(21) 『美理哥合省國志略』について、『海國圖志』に收められたものと『小方壺齋輿地叢鈔再補編』に收められたものとの間に、問題とすべきような字句の異同はない。梁廷枏は『合省國説』の主たる材料としたブリッジマンの著作について單に「志略」と記すだけである。またワイリーが『美理哥合省國志略』の改訂本を一八四六年の出版(書名は『亞美理駕合衆國志略』)と明記していることもあって、『合省國説』の完成した時日(一八四四)を考えあわせた場合、利用できたのは『美理哥合省國志略』以外にないと考えられてきた。しかし『合省國説』より九箇月ほど遅れて完成した『蘭甯偶説』には、二箇所だけであるが『美理哥合省國志略』と『亞墨利(理)格合省志略』という二種の書名が見える(卷二)。他は「志略」で統一されている。また『合省國説』にも、時に『美理哥合省國志略』にはない記述が挿み込まれていたたり、記事が訂正されていたりする。註(61)参照。註(19)で引いたライ氏の編纂したカタログには「亞墨理格洲合省國志略」という名の書物が見え、これは一八四四(道光二十四)年に香港

で出版されたものである。註(17)に掲げたドレイク氏の論文にも同様の言及がある。發行年から見て『合省國説』執筆の際に梁廷枏がこの書を利用していたことは疑うことができない。可能性としては、a『亞墨理格洲合省國志略』だけを利用した、b『亞墨理格洲合省國志略』と『美理哥合省國志略』の兩方を利用した、の二つが考えられる。本論では『亞美理格洲合省國志略』を利用するだけの餘裕がなかった(『美理哥合省國志略』は『小方壺齋輿地叢鈔再補編』に收められたものを利用した)が、兩書の間に重大な内容の相異、使用された語の異同はなかったものと思われる。その理由として、(一)、『合省國説』と『美理哥合省國志略』とを比較してみても大きな異同はないこと、(二)、分かれた節の数が同じであり、節ごとの内容は變化がないであろうこと、(三)、一八六一年に出版された『大美聯邦志略』(これは全面的に改訂したもので面目を一新している)の、改訂の事情を述べた敘文で、ブリッジマンは『美理哥合省國志略』にだけ觸れ、『亞美理格洲合省國志略』には言及していないこと、すなわちブリッジマンの意識の上では後者はさしたる位置を占めていないこと、四、『蘭甯偶説』の中でアメリカ合衆國獨立のいきさつが重ねて簡単に辿られるが、兩書の異同についての記述はわずかに一箇所にしかすぎないこと、等があげられる。據った材料を嚴密に確定できない以上、梁廷枏の利用したブリッジマンの著作に觸れる時、「亞美理格洲合省國志略」、あるいは『亞美理格洲合省國志略』と『美理哥合省國志略』とすべきであるが、あまりにも煩瑣になるため、また兩書に

大きな差異がないことを考えて、本論では梁廷枏自身のやり方にならって、暫く便宜的に『志略』とのみ表記する。ただし、後の章で『美理哥合省國志略』を私自身がとりあげて『合省國説』とあわせて論ずる時には、特に『美理哥合省國志略』と表記する。

(22) 村尾前掲論文 一六二―一五頁。

(23) 吳乾兌・陳匡時「林譯『澳門月報』及其它」(『近代史研究』一九八〇年第三期) 参照。

(24) 『四洲志』の翻譯狀況については、マレーの原本と比較しながら、佐々木正哉氏が精密な議論を展開しておられる。『近代中國における對外認識と立憲思想の展開(二)』(『近代中國』第一七卷 一九八五)。

(25) J. F. Davis, *The Chinese, a General Description of the Empire of China and its Inhabitants* (London, 1836) のうち一部の翻譯。前掲佐々木論文 一九四頁参照。

(26) Emmerich de Vattel がフランス語で書いた國際法に関する著作の英譯本から翻譯された。この事情については、王維儉「林則徐翻譯西方國際法著作考略」(『中山大學學報』一九八五年第一期) に詳しい。

(27) 陳勝舜「林則徐の開眼看世界の珍貴記錄——林氏『洋事雜錄』評介」、陳德培手録、林永侯、孟彭興校點「林則徐『洋事雜錄』」(共に『中山大學學報』一九八六年第三期)。

(28) 林永侯「論林則徐組織的譯譯工作」(福建社會科學學院歷史研究所編『林則徐與鴉片戰爭研究論文集』福建人民出版社 一九八五 所收)。

(29) 前掲佐々木論文 一九七―二二頁。

(30) 『海國圖志』卷三十三。

(31) これらの音譯が原語の何に相當するかは、淺井清『明治立憲思想史におけるイギリス國會制度の影響』(有信堂 一九六九) 六二―六六頁に解説がある。また註(29)参照。

(32) 前掲「林則徐『洋事雜錄』」三四頁 陳德培跋。

(33) 此道光間順德梁君所著、尙有合省國記三卷、昔在光緒初年先檢討日流連於海王邸書肆同得之、合省國記有東漢傳經之家印記、又有不知筆跋數行、按兩書出於各譯籍之先、居百年前而載記歐美事、維與今不無少異、但有今尙未及知者亦史家之祕籍也、合省國記尤爲詳盡、當爲梁君致力之作

民國十一年夏東軒逸人識

(34) その詳細を述べる餘裕はないが、本文に示したような事情以外に、(ア) 前後重複した記事の削除、(イ) 考證のための雙行注の削除(ただし注を『英吉利國記』では本文に入れている例もいくつかある)、(ウ) バランスを失った餘りに長い背景説明の削除、(エ) 固有名詞にひかれた傍線の整備、などが見られる。

(35) 例えば『蘭荷偶説』卷二、第十四葉表で、メリーランド開拓の年代について、『志略』の崇禎三年説を捨て、『四洲志』崇禎十五年説に従っているが、『英吉利國記』第二十九葉裏では『志略』の説を採用している。

(36) 李志剛前掲書 一八五―一九三頁。

(37) 翻譯する者としてのモリソンに注目した著作としては、いうまでもなく柳父章『ゴッドと上帝——歴史のなかの翻譯

者』(筑摩書房 一九八六)があり、問題とすべきことはすでに的確に述べつくされている。本章は、次の章で述べる梁廷枏の考え方を際立たせるために、いくつかの事情を加えながら私なりの述べ方を試みたものである。

- (38) 天理圖書館に收められているものを利用した。以下 Morrison, *Dictionary* へ略す。
- (39) Morrison, *Dictionary*, Part II, Vol. I, preface.
- (40) *Ibid.*
- (41) *Ibid.*, Advertisement to the Sixth and Last Volume, *ibid.*, preface. R. Morrison, *A View of China for philological purposes: Containing a Sketch of Chinese Chronology, Geography, Government, Religion & Customs* (Macao, 1817), p. 1. 東洋文庫所蔵。以下 Morrison, *View* へ略す。
- (42) *Ibid.*, p. 123. Morrison, *Dictionary*, Part II, Vol. I, preface. Morrison, *View*, p. 125.
- (43) Morrison, *Dictionary*, Part II, Vol. I, preface. Morrison, *View*, p. 124.
- (44) Morrison, *Dictionary*, Part II, Vol. I, Information. Morrison, *Dictionary*, Part I, Vol. I, pp. 746—785.
- (45) 註(4)参照。
- (46) Morrison, *View*, preface.
- (47) Morrison, *A Dictionary of the Chinese Language*, Vol. I (Shanghai, reprinted, 1865), Advertisement.
- (48) *Memoirs of the Life and Labours of Robert Morris-*

son. Compiled by His Widow; with Critical Notices of His Chinese Works, by Samuel Kidd, and an Appendix Containing Original Documents, Vol. II (London, 1839), p. 8.

- (49) *Ibid.*, pp. 8—9.
- (50) 翻譯理論からいえば、これは「文化的操作をした翻譯(cultural translation)」ということになるだろう。E・ナイタ著、澤登春仁・升川潔共譯『翻譯——理論と實際』(研究社 一九七三)二五一—二頁。
- (51) *The Chinese Repository*, Vol. III (July, 1834), p. 142.
- (52) W. H. Medhurst, *China: Its State and Prospects, with Especial reference to the Spread of the Gospel: Containing Allusion to the Antiquity, Extent, Population, Civilization, Literature, and Religion of the Chinese* (London, 1838), pp. 558—559.
- (53) 中國側との交渉の漢文文書のほとんど、主として中國の事情を記す場合、辭書のこの部分は有用であつたと思われる。
- (54) Morrison, *Dictionary*, Part III, preface.
- (55) Drake, *op. cit.*, pp. 93—94.
- (56) E. C. Bridgman, *A Chinese Chrestomathy in the Canton Dialect* (China, 1839). 東洋文庫所蔵。例えば林則徐の「諭令繳鴉片」の翻譯を見よ。
- (57) 例えば、『東西洋考毎月統記傳』道光十三(一八三三)年七月—十二月發行のもの、の巻頭に置かれた「序」「論」を見よ。

(58) 以下は序の第一葉表から第二葉表までを要約したものである。

(59) 村尾前掲論文 一七〇—一頁参照。

(60) 『亞美利格洲合省國志略』を手にする餘裕がなかったために、ここで比較検討するのは『合省國說』と『美理哥合省國志略』の記事である。註(21)で述べたように、二つの『志略』の間に内容・語句の點で大きな差異があるわけではない。しかし、あまりに読み込みが過ぎないように、兩『志略』の分段は相異がないことをふまえたうえで、『合省國說』と『美理哥合省國志略』との間に共通する語「衿者」を手掛りに、妥當な範圍内での解釋を試みるにとどめる。

(61) 『合省國說』(A)と『美理哥合省國志略』(B)とを較べると、(A)の「遽欲收前所給印、所命官亦解體」の記事が(B)にはなく、(B)の「費治彌(バージニア)」が「費拉地費(フィラデルフィア)」に訂正されている。これが『亞美利格洲合省國志略』を梁廷枏が利用したことを思わせる一つの例である。

(62) 每郷設學館一所、郷中富者科銀延師、教一郷子弟、若郷中無富者、則在會城中官員處借助、其就學之童、每夕回家、男女皆可以爲師、若女師束脩銀每月不過六圓至十圓、教女童讀書外、並教刺繡、男師則二三十圓不等、亦有專教一家者、又有縣中學館、有無多少不定、惟鄉學館不拘貧富、縣學館無束脩者不可入、因以此項延師故也、其館本處人稟縣官而後建、或縣官公同建造者亦有之、其中所學、比

之鄉學又略大、更有會城中學館、多少無定、城中富者建之、或設會而以會項建之、或官員助之、館中條例、擇幾人議之、並司其事、然後通告同學、學者每年考試一場、取中者入館內、如中國之秀才、習學以四年爲例、不遵律戒、不待四年、亦可以逐之、既習四年、則如中國之舉人矣、散館後或爲官爲士爲農爲工爲商、而各司其事、別有大學館、惟許已中學者進焉、所學有三、一聖文、二醫治、三律例規條、二者不可兼得、又以三年爲期、期滿則猶中國之進士矣(以下略)

(63) 梁廷枏は、學海堂の學長、越華書院と粵秀書院の監院の任にあたり、『越華紀略』『粵秀書院志』の著作がある。

(64) 語義通りにとれば「衿」は生員のことを指しているということになるかもしれないが、當時のカントンは「衿者」を「紳士」「紳著」と同様の意味で使用するところがある。また「紳士」はかなり廣範圍な概念である。廣東省文史研究館編『三元里人民抗英鬪爭史料(修訂本)』(中華書局 一九七八)七九頁。

(65) 『合省國說』卷二。

(66) 村尾前掲論文 一七一頁。

(67) 陳澧『東塾集』卷三 鄒特夫學計一得序。

(68) 梁廷枏『藤花亭散體文初集』卷三 顧氏日知錄跋。

(69) 陳旭麓「關於《校邠廬抗議》一書——兼論馮桂芬的思想」(『新建設』一九六四年第一期)。

THE MEANING OF THE *HAIGUOSISHUO* 海國四說

MURAO Susumu

The *Haiguosishuo* is a work introducing the West written by Liang Tingnan 梁廷柌, a local literate at Canton, soon after the Opium War. The section that introduces the United States (*Heshengguoshuo* 『合省國說』) has often been mentioned as demonstrating Liang's high degree of understanding. The *Heshengguoshuo* is based almost entirely on E. C. Bridgman's work in Chinese introducing the United States, and in that sense it can be said that the account in the *Heshengguoshuo* takes Bridgman's account alone as evidence and unfolds Liang's own interpretation on top of it.

At that time, it was extremely difficult for Christian missionaries to translate Western concepts directly into Chinese without falling into the trap of 'cultural translation.' One can get a glimpse of the difficulty involved and the extraordinary care required to deal with them from the linguistic theories of R. Morrison, who compiled the *A Dictionary of Chinese Language*. Contrary to Morrison's care, Liang paid attention only to whether a given Western concept owed its origin to a Chinese one or not, and as a result, expounded his own views without distinguishing between Western concepts and Chinese ones, and described his own image of the United States. It is probable that Liang's work can be used as a clue in understanding the characteristics and significance in late Qing thoughts.

THE PRIMARY EDUCATION IN MODERN CHINA

KOBAYASHI Yoshifumi

This article investigates how the institutional reforms in primary education from the late Qing to the late 1920s penetrated down to the schools. The reform of educational institution in 1904 was not thorough and left some feudal characteristics. The public schools in local areas